

1996-39

行政指導である家制度と

家族に対する

規範をめぐる

家族についてのディスコース(言説)の出发点として、なぜ必要なのかという問いかけから、近代日本における国家と家制度のシステム、先祖がえりとしての社会風俗など、日本における「家」と「家族」をあらためて問い直します。

対談 ●

岸田秀 VS. 橋爪大三郎

岸田 家族というのは、いわば人間が本能的に作るものではなくて、人工的な一つの文化形態だと思うんです。だから、家族の問題を考える場合には、人間がなぜ家族というものを必要としたかという観点から考えなければいけない。人間の赤ん坊というのははきわめて無能・無力の状態です。生まれてくるわけで、ほかの哺乳類と違って、親が自然な状態で種族保存本能なり母性本能なりに従って育てればすむというものはなくて、非常に不自然な長い期間、誰かの世話にならなければ育たないということがまずある。そういう不自然な状態に対応する自然な本能なんてないわけで、そこでいろいろ無理をしなければいけないわけです。その無理の一つの形態として、家族というものを人間が作ったのだと思いますね。

家族というのはなぜ必要かという、二つの面があると思うんです。一つは、そのように無力で無能な人間の赤ん坊を育てるため。まあ、赤ん坊だけじゃなくて、大人になっても人間というのは動物として弱い存在ですけどね。お互いに守り合い、保護し合わないとは生きてゆけない。それから、女も妊娠すると長い期間働けないから、男の協力が必要です。食料を取ってくるとか、稼いでくるとか。そういう経済的とか身体的といった面の必要と、もう一つは精神的な面でも、家族というのは必要だと思えます。

これも人間がきわめて無能・無力の状態です。生まれてくるということに関連しているんですけども、そういう状態で生まれてきて、誰かの世話になるといふか、誰かに依存して長

期間を過ごすわけですが、その依存しているというのは、単に食い物をもらうということだけじゃなくて、心理的な面も非常に大きい。誰かに愛されている、自分が価値ある存在と見られているという状態が人間の赤ん坊が心理的な安心感、安定感をもつためには不可欠だということです。動物や鳥の親だって、赤ん坊の世話をするけれども、それは基本的に人間の場合とは違う。誰かに愛されているという状態は、赤ん坊の状態を脱すれば必要がなくなるかという、そういうわけにはいかない。そういう最初の条件が尾を引いて、人間というのは死ぬまで一生誰かに愛されているということが必要なのわけです。

ただその必要というのは簡単に満たされるわけではない。愛するほうだって本能的に自然に愛するわけではないので、いろいろ無理や努力も必要になる。ずっと愛されているなんていう幸運な状態はあり得ない。むしろ誰にも愛されていない、不安定な状態にあることが多い。

そこで人間は愛を求めます。単に経済的、身体的に世話してくれたり保護してくれるだけではなく精神的にも愛してくれる人が必要だから、恋愛が発生する。恋愛に永続性を求めて、結婚する。そして子供が生まれると、子供を愛し、そして子供に慕われることを求めます。親孝行されるということも、単に便利で都合だから子供の援助が必要だということだけじゃなくて、心理的な支えということも絡んでいると思えます。

つまり家族というものは、愛される必要がある人間にとって、必要不可欠ではないかということです。家族というのは無理した作りもの、人為的なものですから、理想的家族というか、理念としての家族にはいろいろな形態といるのがあり、と思いますけれども、その理想形態というのは容易に実現するわけではないので、現実の家族の場合、家族の崩壊なんていうことが非常に問題になっていきますけれども、もともと崩壊してない家族はなかったというか、そういう理想・理念に比べれば、いつの家族もどこかずれていて崩壊していたのではないかと思えます。

ただ現代の日本は、夫婦別姓とかが問題になり、夫婦別姓は家族の崩壊をもたらすという議論があるし、この間も新聞を見たら、一生結婚するつもりはないという人が、男性も女性も増えているらしくて、適齢期になれば男も女も結婚して子供をつくって、という形態が崩れてきているらしい。それがとくに日本に見られる現象かどうかは知りませんが、しかし、自分を愛してくれている人というものを必要としている、という人間の条件は変わらないわけで、いわば血縁家族が崩れてくると、疑似家族みたいな、オウム真理教とか、以前にはイエスの方舟みたいなものもありましたけれども、あいう家族と対立する形の宗教的な集団が発生するのではないか。また、「サザエさん」なんていうのが、いつまでも読まれ続けるというのは、これはわれわれ日本人の憧れの家族の形を表しているのではないかと思うんですけれども。

はさまざまな社会を通じて、さまざまな家族のパターンとして実現されてきたし、実現されているのではないのかなど。普通は家族というよりもっと大きく、親族という枠組みのなかで捉えるかもしれません。家族という用語に限って言っても、一夫多妻制もあれば一妻多夫制もある。母系の社会もある、父系の社会もある。父親の役割に比べて、母方のオジの役割を重視する社会もある。それから、ある時期、同性愛を非常に重視する社会もある。というわけで、私たちに、いわゆる核家族が安定した家族のかたちとしてイメージされますけれども、実際には大変に広い可能性がある。そして多様ではあるけれども、その社会に限って言えば、家族の作り方が文化的にきちんと固定されていて、それは本当に動かしがたい伝統で、ある社会に生まれれば、疑うこともなく、人為的であるなんて考えることもなく、その社会の伝統に従った家族を営んできたわけです。そういうふうにしてきた人類の長い歴史というのがある。

近代になって交通が発達すると、さまざまな家族形態がお互いに出会って、「あ、こんな家族もある、あんな家族もある」と、自分たちがやってきたのは何だろうということ、初めて家族というものが意識され、それが言葉に置き換えられたとき、家族は人為的であるという認識に立ちいたったと思います。現在、われわれは当然、家族は人為的であるというのを知っている。一面、生活者としては、その社会の家族のあり方というものを宿命のごとくに受け入れて、これが

橋爪 たいへん的確にご紹介いただきました。今まで家族について述べられた言説は、おおむねいまのお話で集約されているような気がします。私なりにまとめますと、家族という集団をつらぬく、二つのポイントがあるだろうというご指摘です。一つは養育、そして教育（子供の社会化）の問題。親子関係ですね。もう一つは、男女の心理的な安定の問題。愛の問題、結婚の問題。親子と結婚、この二つの要素が絡み合っていて、その人間に宿命づけられたものとしての、安定を実現するための人為的な知恵、これが家族であると。その通りなわけです。

そしてこの人為的という点が、たぶんポイントになるかと思うんです。もともと、家族が今まで人類と呼ばれる社会のなかでは、必ず作られてきた集団であって、たいへん普遍的なものであるということ。人為的であるにしては、あまりに人間の存在と切り離しがたく結びついている。けれどもそれは、家族が人為的な集団でないという意味ではなくて、人間がそもそも人為的な存在だから、というふうに解釈するしかないだろう。

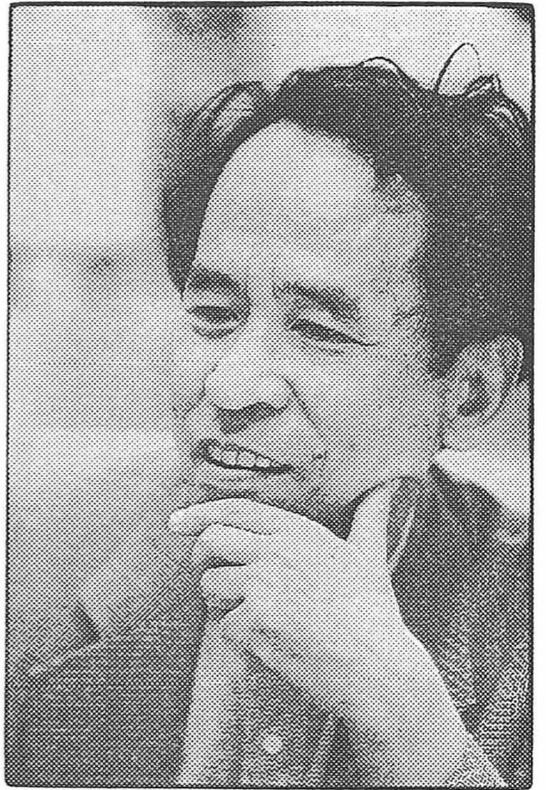
いまご指摘になられなかった点を少しあげますと、家族は確かにその二つの普遍性によってつらぬかれていたんだけれども、この二つ（養育と結婚）、この安定した関係を供給する家族の具体的なあり方を考えてみますと、たぶん相当多くのバラエティがあり得る。個々の家族の具体像に踏み入ってみますと、そこには非常に大きな選択肢があって、実際それ

あたかも自然法則であるかのように、自分の生き方というふうにならなければならなかった。これがまず一つ付け加えるべき点だと思えます。一言でいえば、文化の多様性、家族の多様性というのがあったはずだという点ですね。

岸田 その通りだと思います。われわれは近代になって文化が多様であること、家族は相対的で人為的なもので、いろいろな形態があることを知ったわけで、それまではどの種族も自分たちの特殊な家族のあり方を家族というものはそういうものかと思いついて、家族を営んでいて、家族というものを、なぜ人類が必要としているかなんていうことはまったく考えずにやってきたと思います。しかし、現代では、民族が違えば家族の形態も違うというだけでなく、同じ日本なら日本もなかでも、日本文化の家族はこういう形態だというふうに言えないほどいろいろな形態がありますから、ここで家族というものはどういう必要性に基づいているのか、家族というものはどうあったらいいのかということ、あらためて問題にする価値はあると思います。

●日本における家族の成り立ち

橋爪 先ほど家族というのは理想なんだから、揺らいでないときなんかなかったとおっしゃったんですけれども、その揺らぎには何種類もあるのではないのでしょうか。例えば大昔、ある社会において、家族はこういうパターンであるとみんなが



岸田 秀氏

信じていたとしても、そこでも離婚もあるだろうし、死別もあるだろうし、理想的な家族のあり方からはずれてしまったと……。

岸田 不倫も大昔からあったと思いますしね。不倫がどれくらい悪いことであるかはそれぞれ違っていたでしょうが。

橋爪 そうなんです。家族はルールでできている、約束でできているとすれば、モデルが一つしかなくて、それしか家族を知らなくても、その社会のなかでそこからはずれてしまうというのはあるんですね。こういうことは家族には起こり得ることで、これがひとつの種類の揺らぎである。

でも、これは本当の揺らぎではないと思うんです。という

いうものはこういうものであり、結婚というものはこういうものである。親子関係とはこういうものである、ということが、あんなに微に入り細をうがって、書物のなかに書き込まれている。

インドの宗教は出家主義なので、家族のことはあまり述べていませんが、中国の宗教、儒教はやっぱり家族のことを非常に詳しく述べていて、朝は何時に起きて、顔を洗ってから、お父さん、お母さん、おはようございますと挨拶して、こういうふうには御飯を出さないとか、足を洗いなさいとか、かりにお父さん、お母さんが亡くなったら、こういう服装を着て、何年間、お墓の前の掘っ建て小屋で暮らさないとか、そういう行動マニュアルが全部書いてある。中国ではたくさん民族が、漢民族というかたちで融合していくプロセスで、「漢民族の家族はこうである」ということを、非常に強調しなければならぬような状況があったのではないか。

ユダヤ民族の場合も、偶像崇拜に対する憎しみというものがあります。偶像崇拜に代表されているのは、ほかの民族、ほかの風習に対する警戒心であって、そして純粋なかたちで凝り固まっていく。そしてその一つの道具として、家族のあり方というものを法律のかたちで決めてしまった。たぶん古代民族問題というのが起こってきた状況では、ここで家族というものを強烈に意識するということが起こったのじゃないかと思えます。

岸田 王を父になぞらえることが示しているように、社会は

のは、誰でもモデルどおりのほうがいいと思っているわけで、なんとかそれをこういう方向でフォローアップしよう。孤児のような子供がいたら、誰かの養子にしようとか考えるわけですけども、その発想は同じなんです。

ところが、もうひとつの種類の揺らぎが起こってくるのではないか。これはたぶん古代に文明が開けていった頃だと思えますけれども、文明が開けることによって、文化としての家族が、制度としての家族というものに移行していく時期があったのではないか。文明が開けていくということは、異民族同士が出会うということで、異民族同士が出会うということとは、異民族同士で結婚するということがある。ここに危機が起こるわけなんですけれども、仮に結婚して女性が移動するとすれば、お嫁に行った家で何かをするというところ、ことごといろいろな矛盾が起こってくるわけですね。食べ物、着物、名前の付け方、言葉から始まって、家族のなかで、日常生活に関するあらゆる矛盾が起こってくる。

つまり文明が興った時期が、混血が進んだり、文化的な変容が進んだりして、家族像がたぶんたいへん揺らいだと考えることができると。そこで、「どういふ家族を作ればいいのか」という問いに対してたいへん自覚的になり、「家族はこういうものである」というイデオロギーを作って、そういう家族を制度的に生み出す努力があった。それが宗教の大きな役割であって、ユダヤ教とか、キリスト教にもそのイメージが少し残っています。イスラム教にももちろんあります。家族と

家族の延長といったところがあり、家族の形態というものが社会形態の根本ですから、家族がどうあるべきかという規定は、社会全体がどういふ社会であるべきかということとながっています。そこは決定的であります。家族はどうあるべきかというのを決めなければ、この社会はどういふ秩序で維持されていくべきかというのも決まらないわけです。古代の漢民族とか、イスラム教徒が、家族の非常に細かい点にこだわったというのは民族の存続のあり方にかかわりがあるからで、それはよくわかるんです。

日本の場合はどうだったのでしょうか。古来、家族というのはそんなにはっきりした規定はなくて、なんとなく女系家族みたいなどころもあったのじゃないかと思う。そこに中国から儒教が入ってきて、そこで日本人は初めて、中国の家族形態という、一つの組織立った家族思想にであったのではないか。ところが、中国から輸入した家族形態と、それまで日本人が、家族とはいかにあるべきかということを考えないで、勝手に営んでいた家族というのが、食い違っていたと思われるんですね。しかし日本が国として成立するのは、中国という国の模倣から始まるわけですから、家族という形態も模倣せざるを得ない。中国の家族を見て、これこそは家族だと決めちゃったというか、そのように考えて、日本のいわば理念としての家族がそこで始まった。その理念としての家族というものは、その理念が外来のものであったという関係で、一般の日本人がそれまでやってきたこととズレがあったのだ

やないかと思うんです。

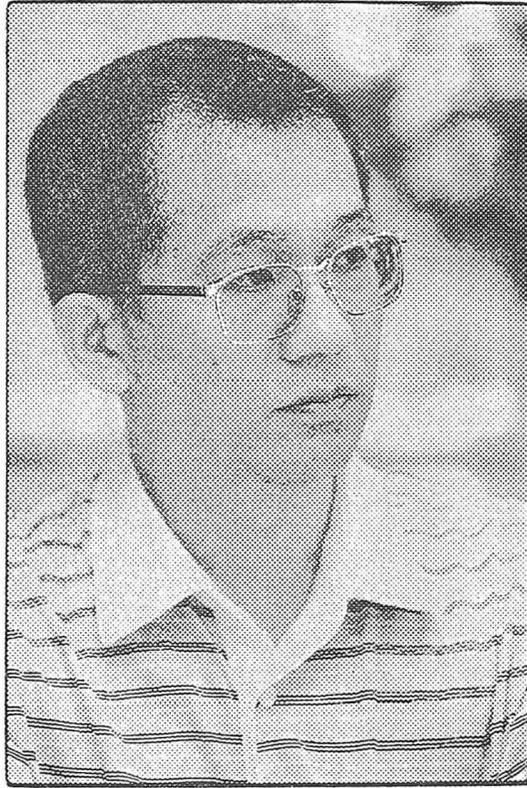
儒教つまり中国の家族というのは、祖先崇拜というか、父親がいちばん偉くて、父親が権力を握っている家族でしょう。日本のほうはなんとなく女のほうを中心であるところがあるって、日本の場合をいうと、理念としての家族は初めから、日本の家族の実態を表しているのではなくて、現実とズレていて、常に崩れていたのではないかというふうに想像しているんです。

橋爪 そこはたいへん面白いと思うんですね。儒教の原則からいえば、男性中心ですので、古代の君子にしる、聖人にせよ、それから黄帝とかいうものにせよ、全部男性で、女性というのはまず出てこない。一方、日本の場合、天照大神というシンボルがある。日本の国家体制やなんかを記述しようとする、女性が入ってきちゃう。ですから、中国的に同化しようとしても、絶対的に無理なんですね。そこで漢字というものを入れて、法律と制度、仏教という宗教、こういうものは一応表面上は中国化したわけです。ところが、家族というのは徹頭徹尾、男性と女性の合意でやっているものですから、中国化できなかった。そこで結婚の形態、いわゆる妻問婚とか、子供の育て方とか、そういうものは表面的な中国文化のなかでも、頑として日本の伝統的な、中国から見れば野蛮なやり方のままだった。

文学について言えば、漢字というものを法律・制度・仏教として運用する場合には完全な漢文ですけれども、それを表そうでない層というのは、あくまで日本的にやってきたのではないか。

●家制度と家族

橋爪 平安時代あたりになると、豪族とかいわれる人たちが親族のグループを作り始める。豪族というのは、内部構造を見てみると、決して男性中心とはいえない面があって、実際には男性が実権を持っていますけれども、それ以前の太平洋などに拡がっているような、双系的というんですか、女性も十分集団を形成する上で、キーになり得るような、そん



橋爪大三郎氏

音化できるということがわかったので、日本の伝承とかを万葉仮名にして、歌も詠むという、婚姻慣習やコミュニケーションみたいなところに文字を使っていくという、新しい方法が生まれた。結局女性たちがいわゆる文学というものを生み出して、男性もそれに応えて、さまざまな詩歌や文学の形態ができたと思います。そうやって混交していったというのが、わが国の精神文化史、家族史にとって、いちばん大事なところではないかと思えます。

ですから長歌にせよ短歌にせよ、それから『源氏物語』を頂点とするような文学にせよ、そういう頑ななまでの日本の家族文化伝統、結婚伝統というものを考えないわけにはいかない。ここに日本の文化的ルーツというものを求めようとするれば、当然仏教でも律令制度でもなくて、国文学の伝統のほうにたぶん行くはずなんですね。

岸田 そうですね。今おっしゃった天照大神が女だったというのは、非常に重要なことだと思うんです。そういう女性中心というか、『源氏物語』における光源氏なんというのは、いってみれば、いろいろな女性たちが登場・活躍するための背景みたいにも見える。そういう女性中心というか、女性が非常に重要な役割を果たしている庶民の文化、具体的なレベルでの男と女の関係というものがずっと続いていて、その一方では中国から受け入れた男性中心主義的な建前というものもあって、やはり支配形態は男性中心になっています。武家とかの層は男性中心文化を受け入れたと思うんです。しかし

な集団であるようなんですね。そのあと武士が出てきて、貴族にとってかわって、武士集団というのを作る。ところが、武士は貴族と違って、戦闘集団であるために、いつでも男性が大勢集まって行動している。貴族は要するに年貢の上がりやを掠め取ればいいわけだから、相続関係がどんなにばらばらでもいいでしょうけれども、戦闘集団としては、集団の機能を維持する関係で、それまでの慣行をずいぶん変えてしまっていて、男性中心に変質したのではないかと、千年ぐらいかけて、それが江戸時代の家制度につながってゆく。家制度はわれわれの知っている日本の家族のあるべき姿の一つのイメージになっています。そこで家制度というものについて考えてみると、これはまず仏教のなかに何の基礎も持っていない。

岸田 ええ。そうですね。

橋爪 仏教とは関係ない。ただし、宗門人別とか、家の宗旨という形で、それに裏づけられてくっついてはいますけれども、お経のなかに、こういう家が正しい、家はこうやって運営しなさいということが書いてあるわけでは全然ない。もう一つ、儒教との関係で見えますと、儒教の原理・原則でできた制度でもないんですね。例えば養子というものがありますけれども、家制度の場合、儒教では考えられないような養子の取り方をします。ということ、儒教的な粉飾を凝らしているけれども、それとも関係がない。では家は何なんだろうということになりますが、それは

政治的な要請によって出来上がった行政指導の産物であろうと、私は思っています。行政指導の産物ですから、行政指導が行き届かない庶民の間では家制度はほとんど定着せずに、夜這いだとか、若衆宿だとか、南洋に起源を持つと思われるような男女ごちゃごちゃの世界が展開されていた。

岸田 武士階級だけです。家制度が徹底したのは。

橋爪 ええ。そういう行政指導の産物であり、イデオロギーであった。しかし、こうした男性中心の家族形態があったことが、日本の近代化にプラスに働いたのではないか。明治維新が成功した一つの理由は、日本が家制度をとっていたことにあるのではないかと思うんです。

岸田 なるほど、家制度の延長線上で受け入れることができたといいことですね、ヨーロッパの制度を。

橋爪 機能として考えれば、家制度下における家族とヨーロッパの家族は、同じじゃないか。そういうふうな理解できたら、家制度、戸籍制度を拡大して、日本中に採用させて、日本中に近代家族を作り出すことができたのではないか。近代家族かどうか知りませんが、とにかく日本中を家にしてしまおうと考えたという、大きなアイデアになっているのではないかと思えますね。

もし家制度がなくて、部族集団のままであつたら、アフリカの部族対立みたいなことになって、家族が大切だというモチベーションを、一人ひとりに与えることがむずかしかったのではないかと考えられるんですけれども。

かに拡大しても、同じ姓を持っている人たちということになりますから、皇帝にも必ず姓があつて……。

岸田 血がつながってないとだめでしょう、中国の場合は。

橋爪 そうです。ですから、皇帝でも、朱元璋とかなんとか、皇帝の姓があつて、その一族はある範囲に限られるんですよ。清朝なんかは満州族ですから、漢民族と家族でないことはあまりに明らかで、そういうイメージはそもそも中国に対しては適用できない。そういうことを言ったとしても、一般民衆は絶対に信じない。

日本の場合、天皇は姓がなくて、神話上、日本人の祖先ということになっていますから、一人ひとりが家族的に行動するということ、明治の作戦が成功したならば、国家は家族であると言いますれば、国家規模で人びとのエネルギーを動員する装置になったのではないか。

これはヨーロッパの考え方も違いますね。ヨーロッパの場合は、家族と国家というのは明確に分かれていますから。国家目標を説明して、国家についての忠誠を要求するときには、家族のことは置いておいて、という形になりますね。

岸田 そうですね。ヨーロッパの場合は、国家への忠誠と家族への忠誠というか、家族主義とをむしろ対立的にとらえています。例えばヒトラーの政策なんかによく出てくると思うんですけれども、ヒトラー・ユーゲントという青年団を作るときも、親を捨てて俺のところへ来いという形ですね。聖書(マタイ伝)にも「我が来れるは人をその父より、娘をその

岸田 そうですね。家制度がなかったとすれば、完全にヨーロッパの植民地にされていた危険がありました。文化侵略でもあるわけですから、ヨーロッパの侵略は、文化侵略に対抗するために、武力だけの問題ではなくて、こちらの文化もそれに対抗するものが必要にならない。そこで日本の家制度というものが、ヨーロッパの文化侵略に十分対抗できるものを持つていたことが幸運だった、ということだと思えますけれどもね。

ヨーロッパに対抗しつつ、同時にヨーロッパのものを取り入れて、ますます家制度という形で日本をうまくまとめた。天皇というものを、国民は陛下の赤子、つまり天皇がいちばん上の親で、国民はその子供であるというような物語を作って、日本全体を一つの家としてまとめることによって、辛うじて対抗できたというのが、明治以後の日本近代だとぼくは思うんですけれどもね、この物語にはいろいろ欠陥もありました。

橋爪 天皇が父親であり、日本全体は家族であるというイメージは、国家としてもある程度効力を持ったし、それから経営家族主義といって、資本主義が発展していくときに、従業員の忠誠を調達するのに、社長さんはお父さん、工場長はお母さん、というのもありましたね。

岸田 国鉄一家とか、昔は言われましたけれどもね。

橋爪 そんなイメージは、例えば中国だったら絶対に受け入れられなかったと思うんです。中国では家族というのは、い

母より、嫁をその姑より分たん為なり。人の仇はその家の者なるべし。我よりも父または母を愛する者は我に相応しからず。我より息子または娘を愛する者は我に相応しからず」と記されています。ヨーロッパでは、家を捨てることで、より大きな集団に帰属する。日本の場合、父親に対する忠誠をそのまま天皇にずらすわけで、ヨーロッパとは基本的に社会をどうまとめていくかという原理が違う。

橋爪 中国の文化大革命の際の毛沢東に対する忠誠を考えてみると、父親を批判させるんですね。父親を批判して、毛沢東を本当の父親だと思えと言っているわけですから、やっぱり家族を破壊して国家につながるというヨーロッパの関係が、日本よりもあると思います。

先ほど、家が行政指導の産物だということに言ったんですけれど、ということは、本当の意味での理想型ではないんですね。ヨーロッパは行政指導の産物ではなくて、むしろ家とはかくなるものであるという定義そのものになっている。その通りにすれば家族になるし、その通りにしなければ、そもそも家族ができないと、こういう関係になっているのではないかと思えます。

キリスト教のファンダメンタリストみたいな人たちが、どんなふうなイメージになるかというと、父も母も子供についても、かくあるべきである、ということは聖書に書いてある。その通りにするのが正しいのであって、それ以外はとんでもないというふうな考えられているわけでしょう。だから、理

想ではなくて、もう絶対的な行動の方程式なんです。そう行動しなければならぬんです。儒教の場合も、たぶんそうだと思うんです。

日本の場合には行政指導だから、聞いても聞かなくてもいい。一般民衆は家なんてどうでもいいと思ってるわけで、そうすると、その発想で外国を見ると、「ああ、核家族というの、こういう点がすばらしいな、できればそれに近づきたい。でも、そういうのに近づかなくても、もともと私たちは家族を営んでいたんだよ」と、こういうふうになるのではないだろうか。

だから核家族とか、近代家族というものがあっても、それはもの好きというか、たまたまそういうのが好きな人はそういうふうによればいいのであって、ちょっとだけやる人や全然やらない人や、いろんな家族があっただけで、ということになる。それなら、家族に対するどんなイメージが日本に入ってきてどんな運動が起こっても、家族の実態は、日本のなかではどんなにばらけていくだけである、というふうに思いますね。

岸田 ばらけていって、どうなるんですかね。

橋爪 つまりどんな社会でも、中国でもどこでもそうですけど、中国とはかくあるものであるという、家族に対する規範が確立した時期があつて、家族の揺らぎを食い止めるために、それ以後家族というのは、その規範に合わせて作られていったと思うんだけど、日本の歴史をどう遡ってみて

も、家族に対する規範というのがないみたいだ。それはまだ、文化のままなんです。

岸田 文化のままという……。

橋爪 文化のままというのは、もともと何族はこういう習慣でした、別の何族はこういう習慣でしたというだけで、何でそうなっているかということは、説明が全然ないわけ。だから自然に違うものになっちゃったり、異民族と接触すれば当然違う形態が出てきますが、でもどうしようもないですね。

岸田 結局、家族という理念は輸入ものというか、もともと外国から来たものですが、日本固有の家族というの曖昧で……。

橋爪 だから、そもそも家族はこういうものであると書き止めてあるテキストがあつて、その通りにしないといけませんという原理主義や国粋主義があつて、その支持者が家族をそういうふうに行っているというなら、これは一つの運動ですけれども……。

岸田 日本にはそれはないわけですね。

橋爪 全然ないんです、それは。

岸田 という、世界の家族のなかで、日本の家族がいちばん揺れているんですかね。ばらばらで、いろんな形態があつて。

橋爪 あるいはどんな形態で家族をやっても、それでも家族だとみんなが信じているという意味では、アメリカの家族よりも安定しているかもしれません。アメリカでは、あるルー

ルを踏み外してしまえば、家族は解体してしまうわけです。

●近代的自我と家族

岸田 明治の欧米化、近代化のなかで、欧米人に対抗するためには、日本人も彼らのように、堂々と自分というものを持つて自己主張ができる近代的自我を作らなければならない、ということが目標になって、その目標のためにいろいろ頑張ったわけですね。そのとき近代的自我の確立を妨げる障害と映ったのが家族だったのではないかと。とくに日本の家族というのは、母親と息子との結びつきが非常に濃いものですから、男の子が近代的自我を確立しようとしたときに、母親との絆が障害になったので、母親を乗り越えていかなければいけないのだということになった。そして、日本国家もヨーロッパ型の近代国家になろうとしたわけで、近代的自我を確立しようとした日本人個人と、近代国家になろうとした日本国家とは同じ現象の二つの面なわけです。

つまり、近代国家を作るために馳せ参じた人物というのは、近代的自我を確立するためには従来のような母親との絆にとらわれていちゃいけないということで、家族との結びつきを切ろうという努力を始めた人物でもあったんですけれども、その努力は成功しなかったと思うんですけれどもね。中途半端に終わってしまった。僕なんか、日本近代における神経症の問題とか、対人恐怖症とか、近代日本人が抱え込んだ

心理葛藤は、そういうことをやり始めて、無理して頑張つて、挫折したところに原因があるのではないかと見ています。

そのようにして、無理して近代的自我なるものを作ろうとして、そして曲がりなりにも近代的自我を持った人たちによって、近代国家としての日本を作ったわけですけども、日本人の近代的自我と同じように、近代国家としての日本国家も脆さを抱え込んでいた。脆いものであったがゆえに、戦争でアメリカさんに負けちゃうと、日本国家というのは今まで、国のため天皇のためとか言つて、みんなが生命を捨てても守ろうとしていた絶対的なものだったんだけど、あれは何だったかというふうになっちゃって、跡形もない。跡形ぐらひはあるかもしれないけれども。それで、戦後日本人は国家という問題から逃げているみたいというか、国家というものをあまり考えないで、アメリカさんに国家を預け放しにしているみたいな感じですね。

明治から昭和二十年まで、一生懸命頑張つて作つて、無理して維持していた国家が崩壊してしまうと、本来もつとしっかりしたものなら、崩壊してもそれなりにまた続くと思うんですけれども、なんかそこでぼつんと切れてしまつて……というのと、日本人が作ろうとした近代的自我が中途半端に終わったということとは、一対のことだと思ふんです。

いわゆる明治以来の日本の知識人が作ろうとした近代的自我というものがぼやけてしまつて、敗戦後、国家のほうもぼ

やけてしまつて、そして昔のままの母親と息子の濃い結びつきは滅びずにとつと続いてきていたものですから、そこだけが強く現在まで残つて、現代の日本人の男性にマザコンが増えているとか、大人にならないというか、なれない若者が増えているとかいうことになつたんじゃないか。国家がぼやけたということは、こうなれば一人前の大人であるという規範もぼやけたということですから、大人になりたくてもなりようがないわけです。そういうわけで、母親が中心になつて、子供たちが固まつている、という家族が今の日本に多くなつたんじゃないかな。

ヨーロッパの父親というのは、背後に絶対神を背負つていたけれども、日本の母親の背後には絶対神はいないし、伝統的に母親を制約していた世間というものも弱くなつてきているのですから、母親中心になつた場合、母親自身に歯止めというか、自分の子供に対する愛情がどうあるべきか、これ以上のことをしてはいけない、これ以上子供を甘やかしてはいけないとか、そういう歯止め、ブレーキ、そういうものがない。可愛がる時も非常に気分的なもので、逆に可愛がらなるとなると極端に冷たくなるというか、虐待したり放つぱらかしたりしてしまふ。母親はこうあるべきだというものもない。

そういう意味で、今の日本の家族というのは、混乱しているというか、母親のさばつていゝるのではないですかね。昔だって、日本の家族の中で母親は強かつたんですけれども、くとも昭和二十年まで、このシステムは生き残つてしまつた。

なぜかという、それは自我を育てて、自発的な自我からなる国家形成を待つのにには時間が足りない、その穴埋めが必要だった。自我が確立してないのに、人びとが一生懸命国家のために働くという、そういう個人的な動機を調達するのは何か、それは家族である。家という制度で、家族的個人的な動機を組織してしまえば、彼らは家のために軍人になり、家のために労働者になり、家のために官僚になり、家のために学者になつて、一生懸命国家のために尽くすであろうという設計があつたんですね。そうやって自我の未成熟な日本人を、間接的にコントロールしようと考えたんだと思ひます。これは一応うまくいったわけですが、自我が近代的な人間、個人というものが育たないという逆作用を及ぼしました。

近代的な主体というのは、日本の場合、家の枠組みのなかで育つ、こういうことだと思ひます。ですから、家制度が日本中に明治期に拡がったということは、自我の確立にたつて、抵抗すべきものだとは必ずしも言えなかつた。むしろ多くの階層の人たちにとっては、家制度に巻き込まれるということは、近代的自我に接近する道だつたわけです。今まで政府と全く関係ない農村だつたんだけど、家制度によつて戸籍ができて、それから徴兵検査もある。そして次男、三男だけでも、甲種合格かなんかでお国のために兵隊に行く

それに対していろんな歯止めがあつたのが、その歯止めが崩れちゃつて、野放図になつていゝるのが今の状態なんじゃないですか。それにどう対処したらいいかという、ちよつとわからないですけれどもね。どうなんでしょう。

橋爪 自我と家の話ですね。

家というのは制度なんですけれども、家産、資産がないと意味がないんです。例えば武士であれば、資産は何石というところで形式化されていゝましたけれども、武士の職分、家老とかその手の何石取りという職分は、家に対して与えられたものですから、相続できるんですね、家督を相続すれば。ということ、一種の資産なわけです。その資産を相続していくために、家という単位が設定されていた。

これは江戸時代のシステムですから、明治政府になつたところで、本来はそれが機能を失うはずだつたんですね。ところが、逆に家制度というものを日本中に拡張することにした。たぶんこれは何十年も保たないはずだつたんですが、そういう選択をしたと。

武士以外にも例えば農家があつて、田畑をずっと相続していくという資産の実態があれば、それは意味があつたんでしょう。けれども、サラリーマン階級、教育によつて階層を再生産し、父親がどういゝる地位にいたからといゝて、子供は全くその職に就くことを保証されないという、最初から振り出しに戻るといゝるシステムでは、家制度には逆機能的なんです。ですから、解体しなければならぬだけども、少な

ことになつた。こういうふうな家に組み込まれることによつて、国家の一員として登録されて、一つの職務が与えられるといゝるのは、そういう近代的な主体になり得るといゝる経験だつたと思ふんですね。

岸田 いや、それは違ふのじゃないですかね。いわゆる農民層、庶民層といゝますか、そういう層においては、家制度のなかで、家のためといゝることが国家のためとなつていくようなコースが考えられたわけけれども、明治の……。

橋爪 家が、自我に対する束縛であると思ひされたのは、ごく一部の知識層だけなんです。それはヨーロッパの自我といゝるものがどういゝるものか、そのオリジナルに触れることができれば、日本のものはインキキだとわかるので、青年として悩むと、こういう関係になつていくと思ふんですね。

岸田 そういう近代的自我の確立を目指した知識層が、家の束縛と近代的自我の葛藤に悩むわけですけれども、しかし明治国家も、そういう知識層が官僚になつて作つたわけで、近代日本においては、家のためといゝことで、国家のためといゝる方向に引きずり込まれる庶民層と、明治国家を担つた知識層との間に、矛盾といゝるか、裂け目が……。

橋爪 それはありますね。小説の担い手は、そういう家と自我とを対立してとらえることのできるごく少数者の知識層だつた。その読み手や一般大衆は、むしろ立川文庫とか読者層としてはそつちのほうが多かつたと思ふけれども、そういう人たちはその裂け目などはあまり意識しない、その区別が

かない。家制度の普及によってむしろ近代的自我を育てられたという感覚を持っていた人もいたのではないかと思うんですね。

ところが、日本の近代的自我のある側面は、大衆庶民層では家によって育てられた面があったとすると、その家が昭和二十一年に廃止されてしまった、その育てるといふ側面がなくなっちゃった。家族のなかに公共性というものが入ってくると思えば、国が家という制度を促進していたという側面だったと思うんです。ですから、お国のためという考え方が、親子の間にあり、兵役の義務とか、大日本国防婦人会とかいろいろあったでしょう。それぞれ家族の役割が同時に国家機関の役割であって重なっていたんだけど、それが全部なくなってしまうと、何が残ったかという、近代的自我であったはずが、一つの私的な欲望になった。親から見れば、子供は自分の私物、所有物になった。これがキリスト教であれば、家族にもホーリーという概念があって、それは神につながっているという意味なんです。神がつながってれば何でもホーリーなんです。ですから、日本の家族にはそういう要素がなくなりました。

そうすると、どうなるかという、今おっしゃったみたいな無規範状態というのが全面的に広がっていく、こういうことになるのじゃないですか。

岸田 そういうことになったのが日本の現状ではないかという事です。

国家であったということが、元にあるのじゃないかなと思うんですけどもね。明治政府の連中が追いつめられて非常にあせっていたという事情はわからないでもないですが……。橋爪 戦争に負けたからといって、家制度が変わるといふのは大変奇妙なことで、本来国家と家族は互いに関係ないのであれば、国家が負けたぐらいで家がどうなるわけはない。もしユダヤ人が外国と戦争をして負けたとすると、だいたいどうなるかという、家制度を強化しようとか、伝統文化を強化しよう、それでも一回戦争に勝とうということになるわけであって、戦争に負けると、普通、伝統的な家制度は強化されますね。だけど、先ほども言いましたように、国家の行政指導の産物であるこの家制度が、国策として国民の上に押しつけられたものであったがゆえに、戦争が終わった途端に家がなくなってしまう。そしてよくも悪くもこの家以外に、自分たちの家族を映し出す一つの理念、規範というものをわれわれは持っていなかったから、それで完全に家がプライベートで、私のものになってしまったということがあったと思うんです。これが他の国にはない、わが国の特別の事情なのではないでしょうか。

●社会秩序と家族

橋爪 最近、ブルセラだとか何とか、十年前までなら非難されるべきだったことが公然化してきて、家族的道徳と反対

家族との葛藤に悩み、家族の絆を断って近代的自我を確立した知識層が近代的国家を作ってきたというところがあった、その知識層と、家のためが国家のためにつながるといふ方に指導されたというか、そういうふうな持っていたか、一般民衆というか、庶民層とが二重構造として、近代日本になかで並存していたと思うんですけれどもね。

日本に純文学と大衆文学という変な区別があるというのも、そのあたりとつながっているのかもしれないですけども、そういう知識層の試みは、一般庶民を悪くいえば騙すというか、うまく操るといふか、そういうことで成り立っている、知識層が作った日本国家もそういう構造の上に成り立っていたわけです。日本国家が敗戦によってガタガタと崩れてしまったというのも、そこに一因があるのではないかと。

知識層だけじゃなくて、庶民層のメンタリティにも支えられていたとすれば、近代日本国家は昭和二十年にああいうふうにはならなかったのじゃないかと思うけれどもね。

敗戦後の日本に国家というのはいないんだというか、反国家主義というか、国家嫌悪症というか、国家というのはいないんだといった気分が漲りましたね。敗戦前の近代日本国家の悪口を言っていたら万歳だったというそのような気分が、未だにいくら続いていると思いますけれども、そういうことになったのは近代日本国家が、いわば庶民を騙したというか、うまく操った上で、その犠牲の上に無理して作った

していたり、というふうないろいろな言われていますけれども、私の考え方からすると、それは先祖がえりなのであって……。

岸田 ブルセラが先祖帰りですか(笑)。

橋爪 ええ。つまり女子高生にしてみると、家族というのは行政指導の固まりなわけですし、本当は自分の本心とか欲望とか、生理とか別にあるのに、建て前で、お父さんはこう言うとか、お母さんはこう言うとか、学校がこう言うというのとで押しつけられて、その固まりで家ができていくように見えるわけです。そうすると行政指導はなければいけないが、自分の自由が増えるわけですから、父親のほうは自信がなくなったり、マスコミが煽り立てると、チャンスに付け込んで、若衆宿とか夜這いとか、そういう伝統が息を吹き返すと思うんです。

岸田 その伝統が今のブルセラなんかに現れている。そうすると高校生売春とかいうのも……。

橋爪 新しい現象じゃなくて、日本の家族が本来持っていた可能性なんだと思うんです。

岸田 ああ、なるほど。そこまで考えなかったですけども。そうですね。そういうふうな考えれば、ブルセラ現象とか高校生売春の現象なんかも、うまく説明が付きましますね。

そうすると、高校生のときに売春をやったからといって、日本の家族は崩壊しないわけだ。例えば高校生のとき売春して、あるときやめてちゃんと普通の結婚をするということが

可能なもの、日本には家族が固有のものとして確立されているのではなくて、行政指導だから、厳しくこうであらねばならないということがないことと関連ある現象なんですかね。

橋爪 江戸時代に身請けという制度があつて、吉原の女郎さんなどが、身請けをされて、家庭の奥さんになるということがふつうにありましたけれども、これはヨーロッパではたぶん考えられないですね。

岸田 ああ、そうか。

橋爪 遊女であるというのは、固定した身分ではないんですね。誰でもそうなる可能性があるので、それは一時的な問題であつて、そこでそういう営業をしていけば遊女だけど、身請けされちゃえば、普通の人になるわけですよ。だから、それは家族と矛盾しないし、家族の正常なメンバーとなることが予定されている。

もちろん売春なんかしないほうがいいとみんな思っているわけですけども、例えば親が病気になるっちゃって、ほかに売るものがなかったら、親孝行のためにそういうことをするということが可能なんです。

岸田 孝行娘ということになる。

橋爪 そうなんです。なぜ可能かということ、そういうことをしちゃいけないと書いてないから、どこにも。そういうテキストがないんですね。外国であればバイブルに、姦淫すべからずと書いてあるから、もうこれはだめですね。それから儒教でももちろんだめです。そんなことをするなら死んだほうがいい

いいんですね。だけど日本では可能なんです。

岸田 そうか。外国では親孝行のために、家に尽くすために遊女に身を落とすなんてことはないわけだな。

橋爪 それは最大の親不孝ですからね。それだったら自殺するほうがいいわけです。

もう一つは、昔の田舎の習慣で、これは地方によるんでしょうけれども、十三歳、十四歳ぐらいになると、初潮が来たりして、おめでたいというので、娘は盛んにセックスを始めるわけですね。そして十六歳とかになって、そういうのも一巡したところで、あの若者と仲良くなってきたようだと、それじゃ結婚させようかと。こういうことをしていたわけですから、高校生がそういうことをしちゃいけないという考え方と、全然ちがう原理で運営されていたわけです。いまの高校生みたいなのに、あんなに発育していたら、当然にしてもいいというのが、昔はあつたわけですよ。

だけど聖書などを読んでみますと、あそこに描かれている家族道徳の混乱なんていうものは、妻まじいものがありまして、要するにメチャメチャなわけです。そうすると普通はどうなるかというところ、このままではどうしようもない。こんな行動規準が混乱しているのでは、少なくとも私とあなたと誰それさん、そういう人たちの間に限っては、きちんとした家族関係を営みましょうという運動が起こってくるものなんですよ。

岸田 はあ、ヨーロッパの場合はね。

橋爪 統一教会なんかにしてもそういう要素がないことはいんですね。例えばセックスに対して非常に潔癖だったりするわけですよ。そうすると、異性に全くアプローチできなくなっちゃう。罪悪感を持たないと異性にアプローチできないわけだから、もうどうしようもない。そうすると、教祖様が誰と結婚するか決めてくれる、という構造になっているわけであつて、その出発点は、異性を異性として見ることに対する罪悪感だと思ふんですね。そこまでいくと病的ですけれども、それは道徳が混乱していることの裏返しじゃないかと思ふんです。

岸田 そうすると、ノアの方舟なんかもそういうこととつながった現象なんですかね。

橋爪 千石イエスのほうですか。

岸田 いや、創世記のノアの方舟です。人類が堕落し、世が乱れ、神が怒って、大洪水を起し堕落した者たちを滅ぼす。そのなかで、義人ノアは神に命じられて方舟を造り、家族と一つがいつの動物たちとともに乗り込んで洪水を逃れ、人類の新しい祖となるわけですね。

統一教会も連中の思い込みではそういうことなんですよ。ソドムとゴモラじゃないですけど、みんな乱れているけど、われわれだけは正しく生きていくのだ、というような思い込みで運動しているわけでしょう。はた迷惑ですが……。橋爪 混乱したときにはまず、全員をなんとかよい方向に導きましようという常識人が出てくるんですよ。でもたいてい

効目がないんですよ。そうすると次に出てくるのは、分離して一部の人が救われようという、一部の人がよくなればほかの人はどうでもいいという考え方ですね。例えば全部で何人いるけど、半分線を引いて、われわれはちゃんとやる。あとの人たちは知りませんという、こういうかたちになると思ふんですね。そして、その知りませんという人たちの側に呪いを投げつけて、甚だしい場合には滅ぼしてしまふ。自分たちの社会のメンバーであるということ認めない。こういうふうになるんじゃないだろうか。

昔、家族に対して一つの規範を掲げて社会を再組織したときには、そういうことが必ずあつたのじゃないか。だから聖書のなかには、ソドムとゴモラは滅ぼされました、とか、ノアの方舟で残りの人たちは死にましたとか、そういう分離と切断と破壊というふうなストーリーが、何回も何回もあるのだと。

岸田 日本にはそういう発想はないですね。一部の操正しい義人だけが救われるというのは。

橋爪 それは文化だからだと思ふんですけども、制度になつてないからだと思ふんです。そもそも滅びということが可能なためには、滅ぼすパワーが必要ですね。つまり神というものが必要ですけども……。

岸田 日本は神がいなくていいから。

橋爪 そうすると、たとえどんなに性関係や道徳なんかは乱れていても、人間対人間のところになってきたときに、かな

りいい加減な男でも、俺はお前を大事にする、ほんとだよな
んで女に言うことは可能だし、女もそれを信じてることができ
ますね。女性が男性に言っても同じです。実態は違つたとし
ても、そのなかでなんとかなっているでしょう。これを信じ
ることができれば、実態が乱れているからといって、家族を
全部滅ぼしてしまふ必要はないんですね。世の中は乱れてい
るかもしれないけれども、私は何々々々を信じていることができ
ると、私は自分の家族はなんとかなつていくと思ひさえすれ
ば、それで当面やつていける。

ただ、神というものを間に入れてくると、神に愛される
ことのほうが、旦那さんや奥さん、身近な人間に愛されるこ
とよりも大事であるという転倒が起こっているでしょう、神
という考え方のなかには。

岸田 神が出てくるとね。

橋爪 そうすると神の目の前で、そんな家族は滅ぼされても
当たり前だという考え方になる。それを救う力は自分にはな
いと。だから、そこで破滅の物語というのが起こるわけで、
これはものすごいパワーですね。そういうフィクションをこ
しらえた人びとがいる。たいていの文明国は、そういうフィ
クションをいったんはこしらえるわけです。

岸田 一神教の世界ですね、それは。

橋爪 いや、儒教は一神教ではないけれども、天というもの
があり、道徳・秩序というのは個々の人間にはどうしようも
ないという考え方がありますから、俺が見逃すからというわ

けにはいかないわけではないでしょうか。

岸田 日本にはそういう天の思想もないし、一神教的な唯一
絶対神も存在しないので、家族というのはこの世にある一人
ひとりそれぞれの男と女が、それぞれの勝手な幻想で愛し合
つて、勝手に結びついてやっついていけばいい、ということなん
でしょうか。

橋爪 そうだとは言いませんが、それとどこが違うかと、外
国の人びとからは見られるのではないかとということですが。

家族というのが一度、一つの行動規範として聖書なり儒教
の古典なり、そういうテキストに書かれてしまうと、家族の
あり方が非常に神聖になって、国家と分離して、国家よりも
根本的になるんです。ですから、アメリカの普通の男性の考
え方からすると、国家も大事だし家族も大事だ。だけど、か
りに国家と家族が矛盾したら、どっちをとるかといえれば、家
族をとりません。だからみんなビートルを持っていてるわけ
です。国家は二百年の歴史しかないけれども、家族は聖書が書
かれてから、これだけの歴史を持っている。中国にしても王
朝がころころ変わりますし、いろんな政策は出るけれど、家
族秩序というのはそれだけのものを持っている。

日本の場合、国家と家族が矛盾した場合は、家族をとると
いう考え方がないと思います。

岸田 矛盾しないんですね。

橋爪 矛盾しないようになってるんです。どんなに矛盾し
ているように見えても、自分で自分の思想をコントロールし

て、矛盾がないというふうに考えていく。「迷惑」という考

え方があつて、ここで俺が国家に楯突くと家族に迷惑がかか
るとか。迷惑という変数を一つ入れると、大抵の矛盾は矛盾
でなくなつちゃうんです(笑)。

岸田 戦争中の考え方にしても、家族のためということと国
家のためということを、対立的に捉えた例はないと思ひます
ね。

橋爪 そうなんです。だけど近代であれば、その対立は必
ずなくちゃいけない。家と家族というのはそこまで違うもの
である。家は行政指導の産物であるから。

だから、文学のなかで家族を描くのは、家族を描く規準を
どこにとるかという点で、大変に困難になると思う。現象と
して家族のなかにどんなことが起こつたかということを描く
ことは可能ですね。心理の動きとか、こういう不倫があつた
とか。でも、だからどうなんだということを照らし出す規準
がないから。

●日本文学における家族

岸田 明治以来、家族を描いた日本の小説というのは、家族
間の葛藤というか、母親の束縛からいかに脱出するかとか、
家族との絆をどう克服して、近代的自我を確立するかとか、
そこで母親とか父親とか、ほかの家族が絡み合っているか
か、そのようなことばかり描いているような気がするんです
けれどもね。

家族というものはいかにあるべきかというようなことは、
あんまり日本の家族を扱った近代小説には登場しないのじゃ
ないですか。

橋爪 私は専門外なので、たまたま知っているものしか言ひ
ませんが、例えば『舞姫』というのがある。これは二つの国
家を移動しているわけですね。向こうのなんとかいう女性
は、彼女はヨーロッパにおける家族概念や恋愛概念とかを背

◎朝日文芸文庫◎

明るい悩み相談室
シリーズ 定価各450円(税込)

朝日新聞読者のドギモを抜いたスーパーヒット連載、待望の文庫化!

中島らもの明るい悩み相談室

中島らものもともと明るい悩み相談室

中島らものまたもと明るい悩み相談室



朝日新聞社

お求めは書店、ASA(朝日新聞販売所)で。

負って鷗外に接している。当然その枠組みのなかで解釈できるようなことをやって、恋愛関係になったわけですね。

ところが彼は帰ってきちゃう。そして日本に婚約者かなんかいるのかな。要するに親族とか大勢出てきたりして、日本の家制度にからめとられてしまう。そこへ彼女が追いかけてくるわけでしょう。ここで二者択一の非常に大きな精神的ドラマが始まるはずなんだけれども、ちっとも始まってないんですね。だからたいへんがっかりする小説なんですけれども(笑)、それが日本の最大の文学者の作品であるということになれば、それから推して、だいたいだめなんじゃないかなと思っっているんですけれど(笑)。

あと『雪国』とか『伊豆の踊子』といった作品における、男女関係のなから神なり超越的な原理を媒介項にして、二人を超えた家族という集団を作り出しているというエネルギーのなさ。

岸田 そうですね。漱石の作品も、どれをとってみても、家族はいろいろ出てきますが、そういう発想はないですね。

橋爪 全然ない。だから男女というものはいくらでも描けるけれど、それを承認している、客観的に見ている視線というものを作者が持っていない。これは文学によらず何でもそうかもしれないけれども、神の視線というのはうんと上のほうにあるから、自分の感覚とか、相手の感情とか、そういうものと無関係なんですね。そういうところから記述するというスタイルをとるわけです。

て、その国家がぼやけると、何がどうでもよくなっちゃう。

橋爪 だから社会がそうできているのに、文学だけそこから飛び上がれというのは無理なんですけれど、しかし文学者には、そういう社会の実態について、自分独自の視点を提供して、こういう例外的な感受性とか、例外的な理性とかいうものがあるんだということを、言葉を通じて訴えかける権利があると思うんですけれどもね。そういう作品が多ければ、私ももっと小説をたくさん読みたいんですけども(笑)。

岸田 僕もあんまり小説は読まないものですから、どうも……。

橋爪 ただ文学の任務は、別にその規範を作り出して明るい展望を切り開くことには必ずしもないと思うわけ。だから文学に望みたいことは、人間の現実をつぶさ、かつ正確に記述する。それが人に感動を与えればなお結構なんですけれども、そういう正確に記述するというか、ありのままに、あるがままを見つめるという、そういう勇気を文字というものを通じて発揮する、ということにあると思うんですね。

そうすると、家族を選ぶなら、現象で家族を書くことももちろんできますけれども、例えば規範がないというふうに書くということ、より現実に近づくことだと私は思うんですけれども、そういうふうな発想がいいのではないか。つまりあるがままの家族を日本で描こうとすると、ある分析軸が必要なんです。例えば家族のほかのあり方と比較するとか、江戸時代の家族や明治時代の家制度と比較するとか、なにかな

岸田 それは神がいませんからね。そういうスタイルは日本人はとれないわけです、そもそも。だから、個人としての男と女が、くっついたり離れたたり、友達を裏切ったり、友達の女を奪ったり、そういうことにおける個人の心的葛藤といえますか、そういうのを描くしかない。

そういう意味で、家族というものをテーマに取り上げた作品というのは、あまりないのじゃないですか、日本文学のなかには。

橋爪 家族は、自分が作り出した一つの集団である、自分の作り出せる集団って滅多にないけれども、家族はそうでしょう。それを守るといふ自覚がないから、国家と明確な角度がとれない。家族を守るといふ角度があれば、国家を批判することができますよね。日頃言っているけれども、少なくとも税金が高いのはなぜかとか、子供にろくな教育ができないのはなぜかとか、こんな交通事故が多くて、娘をおちおち表を歩かせられないのじゃないかとかいって、しょっちゅう批判的意識が出てきますよね。だけど、国家のおかげでわれわれも生きているみたいな感覚になっただけで、そうは思われないですね。

岸田 国家が大きな親だから、その親のおかげで生きているということになっちゃうんだな。親は昔は天皇だったけれども、天皇が親の位置から退いても、やっぱり日本人にとっての国家というのは親のようなものですから、国家と自分の家族を対立させるといふ発想が、そもそもないんだなあ。そして、ただ現実に密着するだけでは、それが何なのかという意味をそこに盛り込むことができない。だからなにか補助線なり工夫が欲しいわけですよ。現実をありのままに率直に書くためにさえもそれが必要だと思っただけでも、そういうことがないのではないか。

例えば家族の現状が無規範である、と書くのは私は正しいと思うけれども、それを小説が書くのは実はたいへんむずかしいことだと思っただけで、そういうことを少し望みたい。無規範な現実が、無規範のままに克明に描かれて、現実もそうであり、文学もそうであるという形で、二重に私たちに突き詰められれば、それに対してどういう方法をとればいいのかという次のアクションがわれわれに起こってくると思う。ただ、経験する通りの現実が小説に書いてあるだけでは、いかなる次のアクションにも結びつかないと思う。

(1996.7.8)
(撮影＝松村映三)